

## 平成28年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）

プロジェクト名	能動的学習における成績評価項目・基準の作成
研究所名	実践女子学園 教育効果測定研究所(所長 人間社会学科 粟津俊二 教授)
設置開始	2015.4.1
設置終了	2019.3.31

### ■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）

本研究では授業で収集した情報等、学修者の個人情報を大量に扱う。そのため、大学研究倫理審査委員会にて、研究の方法やデータの保管方法などについて審査を受け、承認された。これに基づき、下記のような多彩な活動を行った。

#### <能動的学修に関する情報収集 c)>

・PBL、AL を実施した科目のシラバス、実施報告、効果測定などについて、国内の文献を中心に 50 本程度を収集し、整理した。主観的な効果報告が多いものの、ルーブリックやペーパーテストなどによる効果測定が行われているものもあった。

・PBL 科目について福岡女学院大学キャリアセンター、立教大学経営学部において、どのように学生を評価するか？どのように SA を育成するか？を中心に情報収集を行った。また能動的学修の教育的意義について、同志社女子大学・上田信行および研究室学生にインタビューを行った。

・海外を含め複数の学会に参加し、情報収集を行った。

#### <能動的学修の実施 a)、効果の把握 b) 及び評価項目の試作 e)>

・前期「フューチャースキル実践」「実践プロジェクト」、後期「メディアワークショップ」にて能動的学習を行った。また、これらの科目の補助および入学前教育に学生リーダーを導入し、授業イベントの運営や問題解決も含めた PBL を軸とした能動的学修を実施した。受講生、学生リーダーともに、学習内容や自らが経験する変化について質的インタビュー調査を行った。

・PBL、AL を選択する学生の特性を明らかにするため、上記「フューチャースキル実践」を履修希望した学生と、希望しなかった学生とで、PROG テストの結果および学習意欲に関する質問紙調査の結果を比較した。

・前期「社会調査実習Ⅰ」、後期「社会調査実習Ⅱ」を通じて、能動的協働学習における活動成績評価の基準等の作成について研究を進めた。具体的には社会調査実習に参加している学生スタッフを対象に、協働学習を進めている授業活動の様子、協働学習の利点と欠点、協働学習の個人評価・グループ評価について、ヒヤリング調査を行った。この結果は実践女子大学常磐祭にてポスター発表および口頭発表を行った。加えて 1 年間の協働学習を履修した学生を対象に、調査票調査を実施し、協働学習に関する意識を調査した。

・前期「演習ⅡA」、後期「演習ⅡB」、前期「心理学実験実習Ⅰ」、後期「心理学実験実習Ⅱ」の間で、受講者が経験したと「主観的に感じた」内容を比較した。その結果、同じ活動を課してもグループメンバーによって主観的な経験内容がことなること、一方で同じメンバーであっても課題を変えれば主観的な経験内容がことなることが明らかになった。これは、能動的学修において教員が期待する

効果を上げるには、授業内容だけでなく運用時の学習者間相互作用にも踏み込む必要があることを示唆する。

・法政大学キャリアデザイン学部大学院生と協同して特に振り返りと経験学習を軸にしたルーブリックを開発し、他大学との比較調査を行った。

#### ■現在までの達成度

初年度でもあり、達成目標 a) から c) を中心とした活動となった。順調に推移していると考えられる。本年度だけで見れば、ほぼ 100% の達成度である。研究全体として検討すると、今後この結果を踏まえて活動成績評価を作成する段階に入り、全体としては 50% の達成度である。

#### ■次年度以降の研究（見込み）

下記 2 点が主な活動となる予定である。

- ・引き続き a) から c) の活動を継続し、試作したルーブリックの試用と見直し (f) を行う。
- ・卒業生調査などの結果を分析し (d)、評価項目を検討する (e)。

#### ■研究活動における成果

(1) 研究成果（雑誌、学会発表、図書等）

##### 著書

- 1) 松下慶太, 他. (2017). キャリア形成支援の方法論と実践, 北大路書房, 京都, in press.

##### 学術論文

- 2) 松下慶太, 今西正和. (2017). PBL 形式の演習科目におけるルーブリック評価の開発—学生の「振り返り」に着目した授業評価—, 実践女子大学人間社会学部紀要, 13. 93-109.
- 3) 栗津俊二・松下慶太. (2017). 能動的学修科目を選択する学生の特性—PBL 科目を選ぶ動機とコンピテンシー, 実践女子大学人間社会学部紀要, 13. 29-39.
- 4) 竹内光悦. (2017). グループワークを主とする実習および今後の学びに関する意識調査. 実践女子大学人間社会学部紀要, 13. 187-195.

##### 学会発表

- 5) 栗津俊二. (2016). 能動的学習場面における学習者の主観的経験. 日本教育心理学会第 58 回総会.
- 6) 竹内光悦. (2016). 科学的探究につなげるデータサイエンス教育支援. 2016 年度数学教育学会夏季研究会.
- 7) 竹内光悦. (2016). 問題解決力の検証を踏まえた短期集中型データ活用授業の導入と課題. 2016PC カンファレンス.
- 8) 竹内光悦. (2016). ICT を活用した次世代型統計教育の展望. 日本行動計量学会第 44 回大会.
- 9) 竹内光悦. (2016). 統計データを用いた情報発信力育成授業の開発, 2016 年度統計関連学会連合大会.
- 10) 竹内光悦. (2016). 女性社会に向けたデータサイエンス教育の展望, 数学教育学会 2016 年度秋季例会.
- 11) 竹内光悦. (2016). データサイエンス教育に関する調査結果から見る統計基礎教育, 日本計算機統計学会第 30 回シンポジウム.
- 12) 竹内光悦, 他. (2016). 能動的学習における成績評価項目・基準の作成 2016 年度活動報告. 第 3

回実践女子大学常磐祭.

- 13) 竹内光悦. (2016). 今までのアクティブ・ラーニング体験の振り返り、災害対策・復興支援・地域再生をテーマにした分野横断型教育モデルの提案. 私立大学情報教育協会 社会福祉学・社会学・教育学・統計学グループの分野連携アクティブ・ラーニング対話集会.

(2) 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

・幾つかの科目における能動的学修の準備、実施、運営、成績評価、効果測定などに関する知見と経験を蓄積した。これらを可能な限り言語化し、論文や学会発表として公開している。(他の教員が興味を持てば) これらの情報は、学生・生徒の教育に還元される。

・授業における能動的学修だけでなく、すでに単位を取得した学生を雇用し、ファシリテーターやリーダーとしての経験を積ませた。雇用された学生の直接的な学習経験となったであろう。それにとどまらず、今後、SA 制度を設計したり、正課外経験の単位化を検討するさいのモデルケースともなるだろう。